



Title	Quetzalcoatl and (anti-)imperial desire : Gender, sexuality and race in D. H. Lawrence's American and Mexican works
Author(s)	霜鳥, 慶邦
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58768">https://hdl.handle.net/11094/58768</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	霜鳥慶邦					
本籍(国籍)						
学位の種類	博士(言語文化学)					
学位記番号	甲第40号					
学位授与年月日	平成16年3月25日					
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士					
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻					
学位論文題目	Quetzalcoatl and (Anti-)Imperial Desire : Gender, Sexuality and Race in D.H.Lawrence's American and Mexican Works					
論文審査委員	<table> <tr> <td>主査 教授 渡邊克昭</td> </tr> <tr> <td>副査 教授 貴志雅之</td> </tr> <tr> <td>副査 教授 染田秀藤</td> </tr> <tr> <td>副査 教授 斎藤隆文</td> </tr> <tr> <td>副査 関西大学教授 上村哲彦</td> </tr> </table>	主査 教授 渡邊克昭	副査 教授 貴志雅之	副査 教授 染田秀藤	副査 教授 斎藤隆文	副査 関西大学教授 上村哲彦
主査 教授 渡邊克昭						
副査 教授 貴志雅之						
副査 教授 染田秀藤						
副査 教授 斎藤隆文						
副査 関西大学教授 上村哲彦						

## 論文の内容要旨

### 序章 ロレンス、伝統、歴史

序章では、まず、従来のロレンス研究の動向を概観し、21世紀ロレンス研究の課題を明確化することで、ロレンスを、リーヴィス的「伝統」から解放し、「歴史」化することの重要性を主張している。イギリスの歴史は、帝国の植民地拡大と切り離して考えることはできない。よって、ロレンスの歴史化の作業において、海外を舞台にした作品に注目することは、大きな意義をもつ。本論では、アメリカとメキシコを舞台にした作品を中心に考察し、ロレンスを〈帝国〉というコンテクストのなかに歴史化することを目的とする。

考察の準備作業として、ロレンスが、アメリカへ渡る前に執筆した、アメリカ文学に関するエッセイを分析することで、彼が、アメリカという地に、ジェンダー、セクシュアリティ、人種に関する様々な欲望と不安を投射している様子を確認し、分析の焦点を絞る。

以下の章では、これらの問題を中心に、ロレンスの歴史化を進めていく。

### 第1章 ロレンスとアステカの〈太陽〉——『メキシコの朝』における他者性、翻訳、アンビヴァレンス

本作品のなかでロレンスは、進化論的パラダイムを否定し、アステカの〈太陽〉神話を支持することで、「権威」という概念を脱権威化しようとする。しかしロレンスの他者認識には、人種的差異を水平軸でとらえようとする傾向と、進化論的垂直軸でとらえよとする傾向の揺れが存在する。異言語間・異文化間の翻訳の場は、異文化接触の場における支配一服従という関係の脆弱さを暴露するが、自らを脱権威化するロレンスは、他者との交流のあり方を模索する。ロレンスの召使いである、インディオ少年ロザリノは、スペイン語

を習得することで、白人世界への接近を試みるが、ロレンスは、人種間の溝は越えられないと断言する。被支配人種にとって、支配者側の言語を獲得することは、自らの人種の従属的立場からの脱出を意味する一方で、それは白人との完全な同一化を意味しない。模倣行為に見られる脱権威化の効力と、模倣行為ゆえに引き裂かれるロザリノのアイデンティティには、植民地主義の痕跡が確認できる。また、インディアンの儀式を見物するロレンスの姿は、近代ツーリズムの発展によるインディアン文化の変容の様子を映し出していると同時に、観光客の眼差しに潜む帝国主義的欲望の表れでもある。

## 第2章 クレオパトラの叫び——『セント・モア』と帝国の不安（1）

弱体化した大英帝国を描く本作品の一場面で、登場人物の中年女性ウィット夫人は、自分を、英雄を失ったクレオパトラにたとえ、「私を征服して」と、心の中で叫ぶ。この、クレオパトラの一瞬の登場は、当時の言説においてどのような歴史的意味合いをもっていたのか。本章では、〈クレオパトラの叫び〉を、文化的記号として歴史化することで、そこに圧縮された帝国のジェンダー不安を復元することを試みる。

まず、古代ローマから20世紀初めまでのクレオパトラの表象の歴史をたどることで、女神、娼婦、怪物など、様々な形で表象されてきたクレオパトラが、20世紀初めの言説において、〈新しい女〉と密接な関係にあったことが明らかになる。次に、〈新しい女〉としてのクレオパトラを、歴史的言説（特に退化の言説）との関係で考察することで、その歴史的意味合いを明確にし、現代版クレオパトラとしてのウィット夫人が、帝国のジェンダー不安（去勢不安）を様々ななかたちで具現化している様子を明らかにする。さらに、クレオパトラが文化的記号であるならば、〈クレオパトラの叫び〉の声の出所を、文化のなかに探らなければならない。最終的に、「私を征服して」という〈クレオパトラの叫び〉は、「彼女を征服しろ」という〈帝国の叫び〉であると結論した。

## 第3章 アジアからおしよせる悪の洪水——『セント・モア』と帝国の不安（2）

本作品のなかで最も衝撃的な場面は、セント・モアという名の雄馬が突然荒れ狂い、飼い主のリコを背中から振り落とす場面だろう。この時、妻ルウは、全世界が悪の洪水によって飲み込まれ、滅びてしまう幻覚を見る。この幻覚で気になるのは、悪の洪水の源泉が、「アジアの中心」に存在すると記述されている点である。なぜ悪の洪水の源泉がアジアでなければならないのか。本章は、イギリスとアメリカ大陸を舞台とする本作品に、奇妙なかたちで入り込んだアジアのイメージの出所を探ることを試みる。

具体的な論の展開は以下の通り。1) ロレンスのセイロン体験、2) フェルディナンド・オッセンドフスキイ『獣、人間、神々』の影響、3) ギボン『ローマ帝国衰亡史』との関係、4) ドストエフスキイ『罪と罰』との比較、5) 黄禍論。これらの間テクスト的／間言説的

／間歴史的考察によって、本作品に入り込んだアジアが、多重決定された歴史的象徴であることが明らかになる。

よって、〈イギリス（文明）／アメリカ（生命）〉という二項対立に基づいた従来の解釈は、アジアを含めたグローバルな視点からの読みによって、脱構築されなければならない。アメリカ奥地の原始的自然の表象と、野蛮なアジア表象を比較分析することにより、本作品の地政学的無意識が浮かび上がる——つまり、様々な色の野生生物が激しい生存闘争を繰り広げるアメリカ奥地の原始的自然のイメージは、人種間闘争に再び挑もうとする弱体化した帝国の不安と欲望の歪んだ姿であり、アメリカ奥地のイメージは、帝国の願望充足の場——幻想としてのアジア——なのだ。

#### 第4章 〈眠り姫〉の悲劇——「プリンセス」と「馬で去った女」におけるホワイト・セクシュアリティとメキシカン・レイシャリティ

本2作品における〈眠り姫〉のモチーフについては、従来しばしば指摘されてきた。ただし〈眠り姫〉の物語と異なるのは、物語に人種のテーマが入り込んでいる点である。本章は、ロレンス版〈眠り姫〉の物語を、性と人種の観点から再考する。

「プリンセス」の性交場面において、プリンセスは、ロメロの動物性に恐怖し、2人の関係は悪化し、ロメロはプリンセスをレイプする。ロレンスの他の作品では、動物性は生命に満ちたセクシュアリティを意味し、〈眠り姫〉の類話や当時の文化は、女性のマゾヒズム幻想を支持し、男性によるレイプはある程度正当化されていた。ロメロの動物性が否定的・破壊的意味をもってしまうのは、そこに、「レイシャリティ」（本章で理論化を試みている新たな概念）の要素が入り込んでいるからである。言説レベルで作動する装置としてのレイシャリティの概念を導入することで、〈野蛮なメキシコ人表象＝白人男性の性的欲望〉という、直線的投影のモデルにかわるモデルを提示し、複数の種類の帝国主義的欲望が、レイプの場面を重層的に意味決定している様子を分析した。

次に、もう1つのロレンス版〈眠り姫〉である「馬で去った女」を、家庭の境界を侵犯した女性に対する男性的暴力の物語として読む。ケイト・ミレットは、インディアンによる生贋の場面を、女性に対するロレンスの敵意の投影と解釈するが、インディアンの残虐なレイシャリティは、サディスティックなセクシュアリティに直結するのではなく、広い文化的コンテクストのなかで考察されなければならない。女性の肉体・精神への侵入に対する欲望に満ちた19-20世紀の医学・精神分析・催眠術の言説と生贋の場面の類似性を分析することで、ファルス的暴力の多様性が確認でき、生贋の場面には、サディスティックな性的欲望だけでなく、女性の眠りと女性の内部への侵入に対する様々な文化的欲望が存在している点が明らかになる。

## **第5章 女神になったマリンチェ——『羽鱗の蛇』、ジェンダー、アステカの記憶**

本作品には、ケツアルコアトル、ウィツィロポチトリと並んで、マリンツィという女神が登場する。マリンツィのモデルであるマリンチェは、女神ではなく、歴史上実在した人物である。コルテス軍の通訳者としてスペインのアステカ王国征服に貢献し、コルテスの子を産んだこのインディオ女性は、現代メキシコ人の〈母〉であると同時に、母国の〈裏切り者〉として記憶されている。彼女がなぜ、本作品で〈女神〉として登場するのか。

従来の研究は、〈母〉としてのマリンチェに注目し、本作品の女神マリンツィに、母性と豊饒性のイメージを重ねてきた。しかし、〈通訳者＝仲介者〉としてのマリンチェに注目して作品を読み直すことで、〈仲介者〉～〈受動性〉～〈没主体性〉～〈象徴的死〉～〈神聖化〉というイメージ連鎖を浮かび上がり、本作品におけるマリンチェは、自我を完全に棄て去った、男性間のホモソーシャルな欲望の〈仲介者〉という、極めてイデオロギー的な意味での〈女神〉であることが明らかになる。

さらに重要なのは、この作品は、女神マリンツィを創造する一方で、マリンチェのステレオタイプである娼婦・性的墮落のイメージをも、別の登場人物のなかで反復している点である。2つのマリンチェのアンビヴァレントな鏡像関係は、本作品におけるマリンチェ表象のイデオロギー性を暴露することになる。

最後に、ロレンスが占有した仲介者マリンチェを、テクストの脱構築的読みの装置として逆に占有し、テクストに潜む性と人種に関するイデオロギー性を浮かび上がらせることを試みた。

## **第6章 『羽鱗の蛇』の脱神話化へ向けて**

これまでの各章で、ロレンス文学におけるジェンダー、セクシュアリティ、人種の問題に注目しながら、それらを、〈帝国〉という文脈のなかに位置付けてきた。本章は、ロレンスの歴史化の作業の最終段階として、これまで批評家に神話的読解を強制してきた、ケツアルコアトルという強力な神話的象徴の、徹底的な脱神秘化・歴史化を実践している。従来のように、ケツアルコアトルの象徴的内容を解釈するのではなく、ケツアルコアトルという象徴が、小説の内容を神話的に構造化し意味付けようとする行為のプロセスそのものに注目し、その神話化の行為に潜むイデオロギー性を指摘することが重要になる。アステカ時代、スペインによる征服、メキシコ革命、壁画運動、農地問題といった、メキシコ史の様々な要素と、この神話的テクストを歴史と対話させることで、神話的枠組みによって隠蔽された歴史的・政治的イデオロギーを浮かび上がらせることが可能となる。その時、ロレンスの占有したケツアルコアトルが、帝国主義的欲望と反帝国主義的欲望によって引き裂かれた歴史的象徴であることが明らかになる。また、本作品の歴史的意義は、様々な

政治的矛盾を隠蔽しようとする一方で、自らの矛盾とイデオロギー性と限界に自意識的・自己批判的でもあり、自己解体的ですらある点にある。

### 結論 ロレンス、歴史、帝国

ロレンスは、地理的・思想的に絶えず移動し続けながら、自らのポジションを探求した。しかしそれは、共犯的要素・抵抗的要素すべてを自らの内に取り込む、帝国の強力なイデオロギー内部での出来事であったことも事実であり、その結果、ロレンスのテクストは、帝国主義的欲望と反帝国主義的欲望が衝突し、矛盾と分裂に満ちた存在となっている。それは、ロレンスの格闘の痕跡であり、ロレンスという人物の多面性の痕跡であると言える。本論は、アメリカとメキシコを舞台にした作品を中心に議論したが、アメリカ・メキシコものをひとくくりに分類するのではなく、他の代表作と言われるものとの関係で、ロレンス文学全体を再考しなければならず、また、例えばアジアを含めた地政学的広がりの中で分析していく必要がある。今回の議論を出発点として、帝国という文脈でロレンスを歴史化していく作業をさらに維持・発展させ、新たにロレンスを評価していくことが、今後のロレンス研究の課題となるだろう。

### 論文審査の結果の要旨

本博士論文は、従来の D. H. ロレンス研究において、ややもすると軽視されてきたアメリカ並びにメキシコを舞台とする作品に焦点を絞り、大英帝国という歴史的コンテクストの中にロレンス文学を新たに位置づけ、ジェンダー、セクシュアリティ、人種が重層的に織りなす帝国のイデオロギーに組み込まれた彼のテクストがいかに、帝国の欲望と不安を投影しているかを綿密に論証した野心的な論考である。帝国主義的欲望と反帝国主義的欲望によって引き裂かれ、そのいずれともアンビヴァレントな共犯関係を結んだロレンスが、いかに自己矛盾を抱えたまま、帝国主義のイデオロギーと共振する神話的世界を新世界に幻視し、それをまた脱構築せざるを得なかつたかについて、周到な手続きを踏んで緻密な分析が加えられている。

本博士論文は、序章と結論を含めて、8章から成り立っている。序章では、先行研究と最近の批評動向を十分に踏まえたうえで、リーヴィス以来、英文学のキャノンとして確立されてきたロレンス批評のあり方を根本的に問いただし、大幅な批評の枠組みのパラダイム転換が提唱されている。イギリス国内ではなく海外の（旧）植民地からロレンスを逆照射し、帝国の歴史的、政治的イデオロギーとの関係においてロレンスを歴史化してはじめて、新たなロレンス像を提示できるのではないかという立論は説得力に富む。次いで提示される新大陸アメリカに対するロレンスの眼差しに関する分析は、ジェンダーと人種を横断して展開される本論への導入として、本博士論文の意義と射程を具体的に示している。

第1章は、ロレンスがみずからの経験をもとにアメリカとメキシコを舞台として書いたエッセイ『メキシコの朝』を、「他者性」、「翻訳」、「アンビヴァレンス」という三つ

の鍵となる概念で読み解こうとするものである。人種的差異を進化論的垂直軸で捉えようとする帝国主義的イデオロギーと、水平軸で捉えようとするアステカの太陽神話のいずれにも抗しがたいロレンスの揺らぎを詳細に分析している。それを踏まえた上で、異言語間・異文化間の翻訳へと議論を展開し、インディオの少年の英語習得の過程と、オウムの鳴き声を分析することにより、異文化接触の場における支配－服従関係の脆弱さを指摘する。模倣によって主体を引き裂かれる少年のアイデンティティに、植民地主義の痕跡と不安定さを探り当てた本章の議論は、ポストコロニアル理論を十分に咀嚼したうえで展開されており、植民地の水平軸の中に位置づけられ脱中心化されるロレンス像を提示することに成功している。

第2章及び第3章の『セント・モア』に関する分析においては、主として帝国の不安に議論の焦点が絞られている。リーヴィス的現代文明と『セント・モア』の象徴性を前面に出すのではなく、一見単なる白人優位主義者のような一人の登場人物、ウイット夫人とクレオパトラを対比させながら、ヨーロッパ崩壊の元凶と位置づけられるアジアに帝国のジェンダー不安（去勢不安）の投影を見る議論の運びは鮮やかである。クレオパトラの「私を征服して」の意味を、ウイット夫人と関係させて論じ、悪の根源がアジアであるとして恐れる帝国の不安を、クレオパトラの叫びと同化させ、それを帝国の叫びへと転換させる論理展開は説得力を持つ。種馬セント・モアを連れて渡るアメリカ南西部の表象を、悪の源泉としてのアジアと関連させることで、帝国の不安と歪んだ欲望を捉えようとするこの章は、オッセンドフスキイに少なからず依拠して議論が進められているが、アメリカ奥地の原始的自然のイメージが、帝国の願望充足の場としてのアジアと重なるという主張は創見に富む。

第4章は、「プリンセス」と「馬で去った女」における眠り姫のモチーフを中心に議論を展開している。本章において機軸をなす概念は、ホワイト・セクシュアリティとメキシカン・レイシャリティである。「プリンセス」におけるメキシコ人の案内人口メロによるプリンセスのレイプは、そこに人種性、政治性を持ち込んで考えると、この作品が今までとは異なった様相を呈してくるという議論の切り口は斬新である。この作品は本来サディステックな欲望を描いた、ロレンス的男性像としてのロメロとして読まれてきたが、ロメロがメキシコ人であることの意義を考察し、視点をレイシャリティに移すことによって、帝国主義的欲望の観点から作品を解釈することができるという指摘は、具体的な論証により裏付けられている。男性的暴力が家庭の領域に侵入して女性を侵す作品としてこれまで読まれてきた「馬で去った女」に関しては、ケイト・ミレットは、作者ロレンスの女性に対する敵意を反映した作品であると解釈するが、19世紀から20世紀初頭にかけての医学ディスコースなど、広範な文化的コンテクストに作品を置いてみると、従来の解釈よりはるかに多様化した文化の欲望が見えてくるという筆者の主張は、文化研究への十分な目配りを感じさせる。

『羽鱗の蛇』を論じた第5章、第6章は、本論文で著者が一番力を入れて書いている章であるように思われる。メキシコの神話、ケツアルコアトル神の復活に題材をとったこの物語は、革命期のメキシコを舞台にして現代のメキシコの神話として読まれてきたが、今日まで母性と豊饒の女神的像として解釈されていたマリンチェを、歴史的事実から解釈し直す手法は斬新かつ野心的である。通訳者→仲介者→受動性→没個性→象徴的死→神格化というイメージ連鎖を浮かび上がらせることにより、男性間のホモソーシャル

な欲望の仲介者という、極めてイデオロギー的色彩の濃い女神であることがまず指摘される。次いで、「白いマリンチエ」と「黒いマリンチエ」が同時に創造されるプロセスを分析することにより、セクシュアリティとレイシャリティが複雑に絡み合ったイデオロギー性が、うまく浮き彫りにされている。これらの2つの章では、ステレオタイプ化された表象についてさらなる精査を行う余地が残ることが指摘されたが、ロレンスの歴史化の作業の最終段階として、脱構築的手法を駆使してケツアルコアトルの強力な神話的象徴の脱神話化を行い、テクストの背景に隠れた帝国主義的欲望を前景化することに概ね成功している。

結論部では、伝統的なロレンスの読みを脱中心化し、アメリカとメキシコを舞台にした作品のみならず、他のロレンスのテクストをも、歴史的、政治的文脈を意識した新しい批評パラダイムのなかに位置づけることにより、ロレンスを歴史化する必要性が説得力をもって主張されている。それに加えて、この論文に関して予測される質問、例えば、芸術作品としてロレンスのテクストをどう評価するか、といったような問い合わせに関しても、何ゆえその問い合わせに答えていないかについて筆者の見解が述べられ、今後のロレンス研究の一つの方向性を明確に打ち出している。この点に関しては、口頭試問においても、本博士論が、ロレンス文学を帝国主義的イデオロギーに還元してしまう危険を孕んでいるのではないかとの危惧が表明されたが、審査委員を十分に納得させる応答が得られた。

本博士論文は、ロレンス文学を「偉大な伝統」の枠組みにおいて定位してきたリーヴィス的イデオロギーからの根本的な脱却を目指し、従来の研究が敢えて射程に入れなかった人種性、異国性、移動性、政治性、歴史性、イデオロギー性に徹底した分析を加えることにより、ロレンス像を脱神話化し、イギリスの帝国主義的拡張と彼の文学の密接な共犯的・批判的関係を浮かび上がらせるという、野心的なグランドデザインに基づいて構築されている。このようにポストコロニアル的視点に立脚し、カルチュラルスタディーの成果を十分に取り入れながら、ロレンスのテクストの緻密な読み直しを通じて、彼の文学を「偉大な伝統」とは別の歴史的文脈のなかに位置づけようとする本研究は、単にロレンス研究の意義を根源的に問い直すのみならず、ロレンス研究のパラダイム・シフトを果敢に模索するものとして、学会において高い評価を得ている。本論文の一部が、既に日本英文学会並びに日本ロレンス協会のジャッジ付きの機関誌に掲載されており、両学会の全国大会における数度の口頭発表においても高評を得たことはその証左である。

その分析のアプローチにおいて、ジェンダー、レイシャリティ、地理的隔たりを自在に横断しつつ、グローバルなマクロ的視点より、異国表象との関係において交錯するディスクースのせめぎあいを綿密に解きほぐす本博士論文は、帝国主義時代の政治現象と文学的表象との関係に斬新なメスを入れるという意味において、ロレンス研究のみならず、今後の英文学研究の歩むべき道筋を確実に先取りし、実践するものとして大いに評価できる。

最後に、本論文の英語の秀逸さについて言及しておきたい。精緻なテクストの読みと歴史的背景に関する膨大な資料に依拠しつつ、緻密な論理によって構築された本論文は、極めて高い水準の達意の英文で書かれている。批評理論を自在に駆使して展開される重厚な論文内容、英語のレベルの高さのいずれをとっても、本論文は今後のロレンス研究、

英文学研究に資するところ大であり、国際的な水準に到達していると判断される。

以上を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士の称号を与えるのに十分ふさわしい業績であるとの結論に達した。